



重くて怖い紙

唯川 恵

学校を卒業して、私は地方銀行に就職した。

その新入行員の研修会で、いきなり目の前に百万円の分厚い札束を差し出された時は驚いた。

銀行員の基本、札の数え方の講習である。

生まれてこの方、そんな大金は見るのも触るのも初めてだ。ましてや、印刷の匂いが立ち上るようなびかびかの新札である。

まずは、先輩の行員がお手本を見せてくれた。札束の一角を押さえ、扇のように広げてゆく。それから右手の親指と人差し指で札を一枚滑らすように手前に引き、中指で弾いて前に倒す。慣れてくると、一枚ずつではなくて、三枚三枚四枚で十枚の二区切り

にし、札を向こう側に倒してゆく。もつと慣れると、五枚五枚で数えてゆく。その手捌きは、私にはまるで手品のように見えた。

新入行員が順次に手ほどきを受け、いよいよ私の番になった。

封を切ったばかりの新札はひんやりと滑らかで、いつも自分が財布の中に入れていた札とは違うもののように思えた。教えられた通りに数えるのだが、滑りやすいし、静電気もおきやすい。何回数えても、九十九枚だったり、九十八枚だったりした。

その上、ちよつと油断すると指先を切ってしまう。よく『手を切るようなピン札』などという言葉があるが、あれは本当なのだと思つてつくづく思った。

続けて、旧札の数え方も教えられた。旧札は同じ百万円の束でも、新札の三倍くらいの厚みがある。

その分、新札よりもはるかに扱いにくい。どう試みても扇のようには広がってくれないのだ。元は同じ二万円札なのに、触った紙質も、それぞれにまったく違うもののように感じられる。

私は手を止めて、改めて旧札を眺めてみた。

やはり、一枚一枚、違うお金のよう



唯川 恵(ゆいかわい) 1955年石川県生まれ。金沢女子短期大学卒業。84年、「海色の午後」で第3回コハルト・ノベル大賞を受賞。02年「肩ごしの恋人」で第126回直木賞を受賞。著書に「永遠の途中」(光文社刊)など。

見えた。くしゃくしゃなのをやつと伸ばしたものだつたり、札の隅に数字や文字が書き込まれていたり、染みがついていたり、水に浸したようにこわこわしているものもある。

ここでこうして、私の手に数えられるまで、この二万円札はいつだってどんな人たちの手を渡り歩いて来たのだらう。きつと多くの人間を幸福にし、時には不幸にもしてきたに違いない。

考えてみれば、一枚がこれほど多くの人間の手から手へと渡り歩く紙は他にはないのではないか。

そんなことがふと脳裏に浮んで、改めて「お金」という印刷された紙の重みと怖さを感じずにはいられなかった。

先日、銀行のATMから引き出した札の中に、福沢諭吉の顔にキスマークがついた二万円札があった。

そこにどんな経緯があるのか。私は小説の構想を膨ませるように、ついそのストーリーを想像し、しばらく眺め入っていた。

PAPER COLUMN Vol.2

木を無駄にしません

日本の紙の原料は「古紙」が60%、残りの40%が「木材」です。さて、この「木材」について、皆さんのような「木材」を使っているか考えたことがありますか?(右グラフ参照)

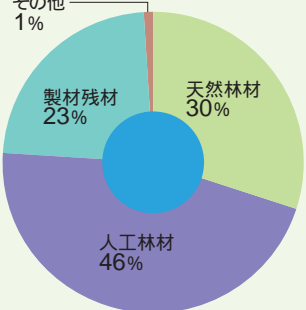
天然林材は建築材などには使えない細い木や曲がった木が利用されています。これらは森林が減らないように、きちんと適切に管理された山から切り出された木材です。

人工林材は主に紙の原料にするために植林した木材です。

製材残材は丸太から建築用の製材を切り出した時に出る半端な木材です。(右図参照)

このように、紙の原料になる木材は、できるだけ無駄なく、工夫して上手に利用しています。

紙の原料になる木材の構成比 (2002年)



資料:経済産業省「紙・パルプ統計」

